

養育者の子育て目標志向性と育児行動に関する原因帰属との関連性

浜崎 隆司¹・田村 隆宏¹・塩路 晶子¹・森野 美央²・
加藤 孝士³・岡本かおり⁴・吉田 和樹¹・安藤ときわ¹・
三井 理愛¹・朴 信永⁵

The relationship between goal orientations of childcare and causal attribution of behavior in childcare on parents

Takashi HAMAZAKI¹, Takahiro TAMURA¹, Akiko SHIOJI¹, Mio MORINO²,
Takashi KATO³, Kaori OKAMOTO⁴, Kazuki YOSHIDA¹, Tokiwa ANDO¹,
Rie MITSUI¹, Shinyoung PARK⁵

The purpose of this study was to investigate the relationship between goal orientations of childcare and causal attribution of behavior in childcare on parents. Participants were 326 parents who are taking care of children. They were examined the consciousness of goal orientations of childcare and the causal attribution of behavior in childcare. A factor analysis revealed three factors for the goal orientations of childcare: “performance-approach goal orientations”, “performance-avoidance goal orientations”, and “learning goal orientations”, and did three factors causal attribution of behavior in childcare: “the controllability”, “supports from surroundings”, and “the matters happening by accidents”. We investigated the relations between their factors. As a result that the parents with performance-approach goal orientations were easy to attribute the controllability as a causal of succeeding behavior in childcare, and to do the supports from surroundings as a causal of failing behavior in childcare. On the other hand, the parents with performance-avoidance goal orientations were easy to attribute the supports from surroundings as a causal of succeeding behavior in childcare, and to do the controllability as a causal of failing behavior in childcare. the parents with learning goal orientations were easy to attribute the controllability as a causal of succeeding behavior in childcare. It was suggested in this study that the child care support which parents need is different by the difference of their goal orientations of childcare.

Key Words : goal orientations of childcare, causal attribution, behavior in childcare

目 的

少子化対策という名の下ですすめられてきた「子育て支援事業」に関して、現存の支援事業

が全ての養育者に効果をもたらしているとはいえない状況が浮き彫りにされている（神田・山本，2001）。そこで、養育者側の視点に立って、養育者の子育て目標に応じた子育て支援が求められるようになってきた。

目標志向性とは、目指しているものの達成に向かって個人の認知・行動・感情を方向づけるもの、すなわち目標の方向性のことである。例えば、学習目標志向（例：子育て中は、できる

1 鳴門教育大学
2 比治山大学
3 東京福祉保育専門学校
4 洗足こども短期大学
5 宇部フロンティア大学

だけたくさんのことを経験してみたい)、遂行接近目標志向(例:他の人より良い子育てをしようと思うと、やる気がでる)、遂行回避目標志向(例:他の人より子育てが下手と思われないうようにしたい)の3種類がある。

目標志向性については、学習に対して持っている目標に関する研究が中心的であるが(例えば、Elliot & Church, 1997; 田中・山内, 2000)、近年、対人関係に対して持っている目標を取り上げた研究も出てきている(黒田・桜井, 2003)。

黒田・桜井(2003)は、Dweck & Leggett(1988)や桜井(1995)をふまえ、従来の学業場面における目標理論が対人関係場面にも適用できるとして、特に友人関係場面を取り上げた検討を行っている。彼らは、学習目標に対応する目標として、「対人的経験をし、自己を成長させようとする」という経験・成長目標を、遂行接近目標に対応する目標として、「社会的属性(パーソナリティや社会的スキル)についての良い評価を得ようとする」評価-接近目標、遂行回避目標に対応する目標として、「社会的属性についての悪い評価を避けようとする」評価-回避目標を考え、これらの目標と中学生の抑うつとの関係を見たところ、経験・成長目標や評価-接近目標が抑うつを抑制し、評価-回避目標が抑うつを促進する可能性が示されたとしている。

対人関係場面でどのような目標を持っているかで抑うつとの関連が変わってくるという結果は、日々が対人関係場面の育児における抑うつを理解したり、どのような育児サポートが必要かを考えたりする一つの手がかりになるかもしれない。小林(2009)は、母親の育児関連のストレスが抑うつに影響していることを明らかにしている。そして、抑うつを予防するためには、母親自身がストレスへのコントロール可能性を認知する必要があること、ストレスのコントロールが困難な場合に夫からのサポートが有効であることを見出している。子育て支援を考える際、子育てによって生じるストレスに焦点をあてることも必要であるが、そもそも養育者はそれぞれどのような動機にしたがって子育てをしているか、という原点、つまり子育て目標志向性へ焦点を当てることで、有効な子育て支援のあり方について、従来とは異なった視点で考えることができるものと思われる。

また、「子どもが0歳なら親も0歳」と言わ

れるように、子育てには、対人関係のみならず学びの場面も含まれる。生涯学習の観点からすると、子育てに関する知的能力を伸ばそうとする学習目標志向、知的能力について良い評価を得ようとする遂行接近目標、悪い評価を避けようとする遂行回避目標という側面の存在も考えられる。

ここでは、従来の学業場面における目標理論を対人関係場面に適用した黒田・桜井(2003)をふまえ、対人関係も学びの場面も含まれる子育てにおける「子育て目標志向性」についての尺度を設定し、養育者が子育てに対して持っている目標がどのような側面で捉えられるのかについて検討する。

さらに子育て支援の有効なあり方について考えた場合、養育者が持つこれらの子育て目標志向性の違いは、求められる支援のあり方を違ったものにするのであろう。このような養育者の違いに応じた様々な子育て支援のあり方をきめ細やかに充実させていくことが、今後の子育て支援を考える上で極めて重要な課題になるものと思われる。そこで、養育者が求める子育て支援のあり方を探る指標として育児行動に関する原因帰属に注目する。原因帰属とは行動の結果の原因を何に求めるかということであり、育児行動に関しては、育児で成功したことや失敗したことの原因が何にあったかについての認識ということになる。例えば、子育てで成功したこと、失敗したことが自分の努力や養育能力といった内的な要因に帰属する養育者もいれば、周囲からの支援の有無といった外的な要因に帰属する養育者もいるであろう。ここに養育者が求める子育て支援のあり方が反映するものと考えられる。例えば、育児で失敗した原因が自分の努力や養育能力にあると認識している養育者に対しては、自分の努力が認められたり、努力を促したり、養育能力が高まるような働きかけが特に求められていることになるであろう。それに対して、失敗の原因を周囲からの支援がないためと認識している養育者には、周囲の人の協力や援助が特に求められることになるであろう。このように、特に養育者が失敗したことの原因を何に帰属させているかを知ることによって、養育者が求めている子育て支援のあり方が把握できるものと考えられるのである。

以上を踏まえて、本研究では育児中の養育者を対象として、養育者の子育て目標志向性と育児行動に関する原因帰属の間にどのような関係

があるのかを明らかにし、養育者に応じた子育て支援のあり方を考える上で一つの方向性を探ることとする。

方法

調査・分析時期：7月～12月（尺度項目の検討）

1月～3月（調査実施）3月（分析・考察）

調査対象：子育て支援の必要性を特に感じている養育者を対象とした。特に、1歳半・3歳児健診や保育所・幼稚園保護者を対象とした。調査対象者数は326名であったが欠損値のデータをのぞいて310名を対象とした。

調査範囲：調査の範囲は、徳島県（徳島市・鳴門市）を基本軸とし、徳島県以外の地域（岡山県、山口県、愛媛県、北海道）においてもアンケート調査を実施した。

アンケート：子どもを持つ保護者の子育てに関する考え方について子育て目標志向性を調査する質問項目、および子育て観にかかわる保護者側の問題を原因帰属という視点からとらえるために、子育て時における成功例、失敗例の理由づけについての質問項目を含んだアンケートも実施した。

子育て目標志向性については、従来の学業場面における目標理論を対人関係場面に適用した黒田・桜井（2001）で用いられた目標志向性尺度（経験・成長目標10項目、評価一回避目標8項目、評価・接近目標7項目）および学業場面における田中・山内（2000）の目標志向性（マスター目標志向6項目、遂行接近目標志向6項目、遂行回避目標志向4項目）を参考に、対人関係も学びの場面も含まれる子育てにおける「子育て目標志向性」を仮定し、子育て目標志向性という観点で尺度を設定した。つまり、養育者が子育てに対して持っている目標を、経験・成長・学習目標志向（例：子育て中は、できるだけたくさんのことを経験してみたいと思います）について5項目、評価・遂行・接近目標志向（例：他の人より良い子育てをしようと思うと、やる気がでます）について5項目、評価・遂行・回避目標志向（例：他の人より子育てが下手と思われぬようにしたいです）について5項目の15項目で構成されている。評定は「全く当てはまらない」（1点）から「非常に当てはまる」（5点）の5段階で求めた。

アンケートで用いる育児行動に関する原因帰属尺度の項目抽出のため、現在幼児を養育中の母親10名と過去に養育経験のある女性8名に、

“子育て中に失敗を犯してしまったとき、どこに原因があると考えますか（考えましたか）”という質問に対する自由記述で得られた回答内容を、調査者と教育心理学の修士課程を修了した者の2名で協議し、得られた項目を養育者自らの努力や養育能力に帰属する“統制可能性”，周囲の人や行政機関の協力・支援を帰属する“周囲からの協力・支援”，運の良さやそのときの調子の良さなどを帰属する“偶発的事項”の3分類を想定の上、分類・再構成した。その後、発達心理学を専門とする大学教員により文章が理解できるのかを再度検討し、一部文章を修正したものを失敗場面の原因帰属の項目として使用した。その後失敗場面の項目を再度検討し、成功場面にも応用できるよう問題文を修正し、成功場面の原因帰属の項目として使用した。最終的には、成功場面、失敗場面とも“統制可能性”に関するものが“自分がしっかり努力したから（しなかったから）”と“自分の養育能力が備わっていたから（なかったから）”の2項目、“周囲からの協力・支援”に関するものが“周りの人が協力してくれたから（してくれなかったから）”と周囲の人や行政機関の支援があったから（なかったから）”の2項目、“偶発的事項”に関するものが“その時の自分の調子がよかったから（よくなかったから）”，“運がよかったから（よくなかったから）”，“子どもが言うことを聞いてくれたから（聞いてくれなかったから）”の3項目となった。各項目の評定は「全く当てはまらない」（1点）から「よく当てはまる」（5点）の5段階で求めた。

結果

子育て目標志向性の因子抽出

子育てに関する目標志向性尺度について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、3因子を抽出した。共通性が低い項目及び因子負荷量が.350に満たない項目を削除した。最終的に12項目を子育てに関する目標志向性尺度の項目として採択した。第1因子に負荷の高い項目は、“周甲の人に、「子育てが上手という印象を与えたい”や“他の親よりも子育てが上手と言われたい”といった、子育てに対する周囲からの肯定的な評価に関する項目により構成されているため、「遂行接近目標志向性」因子と名付けた。第2因子は、“子育てが他の親よりも上手くできなかったらどうしようと考えることがよくある”や“だめな親だと言われな

いたためにも子育てを頑張りたい”とった、子育てに対する周囲からの否定的な評価に関する項目により構成されているため、「遂行回避目標志向性」因子と名付けた。第3因子は“悩みながら子育てする時でも生きがいを感じる”や“たとえ私の子育てが周りから評価されることがなくても、子育てをすることは楽しい”といった、母親自身が子育てから得られる生きがい

や満足感について測定する項目から構成されているため、「学習目標志向性」因子と名付けた。さらに、尺度の内的一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した結果.77の値が得られた。同様に各因子の α 係数を算出したところ、第1因子は.81、第2因子は.67、第3因子は.63であった。

Table1 子育て目標志向性尺度に関する因子分析結果

	I	II	III	
14 周囲の人に子育て上手という印象を与えたい	.807	.021	-.087	
3 他の親よりも子育て上手と言われたい	.787	-.193	.089	
10 子育てを頑張って、自分の子育ての上手さを周りの人に見せたいと思う	.731	.036	-.019	
13 子育てで上手くいっていない部分を、周囲の人に知られたくないと思う	.461	.242	-.143	
4 子育てで一番大事なことは、他の親よりも上手くできているかどうかだと思う	.441	.023	-.066	
9 周囲の人から、良い親だと認められるような子育てがしたい	.440	.297	.194	
11 子育てが他の親より上手くできなかったらどうしようと考えてることがよくある	-.160	.832	-.116	
12 だめな現だと言われたいにも子育てを頑張りたい	.111	.586	.143	
6 周囲の人に、「子育てが上手くいっていない親」と思われると不安である	.125	.503	.017	
2 悩みながら子育てする時でも生きがいを感じる	-.077	.007	.723	
8 たとえ私の子育てが周りから評価されることがなくても子育てをすることは楽しい	.035	.004	.615	
1 子育ては、子どものためでもあるが、自分自身の成長にもつながると思う	.065	-.011	.517	
	因子間相関	I	II	III
	I	—	.628	.035
	II	.628	—	-.090
	III	.035	-.090	—

育児行動に関する原因帰属尺度の構造の妥当性

まず失敗場面の原因帰属尺度の構造が従来想定した構造であるのかを確認的因子分析を用い検討した。その結果、.900以上が採用基準であるGFIは.989であり十分に高い値を示し、AGFIも.955と高い値を示した。更に.100以下の値を採用基準とするRMSEAは.034と非常に低い値を示した。これにより、本研究で使用した尺度は、当初の予定通りの構造をしていることが示された。続いて成功場面の原因帰属尺度についても従来予定通りの構造をしているのかを検討した。結果、.900以上が採用基準であるGFIは.989であり十分に高い値を示し、AGFIも.958と高い値を示した。更に、.100以下の値を採用基準とするRMSEAは.041と非常に低い値を示した。これにより、成功場面の原因帰属尺度は、想定通りの構造であることが示された。

子育て目標志向性と育児行動に関する原因帰属との関連性

(1) 子育ての目標志向性と成功体験の原因帰属

との関連性

遂行接近目標志向性との関連性

子育てに関する遂行接近目標志向性が子育てにおける成功経験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を遂行接近目標志向性の高い群と低い群に分類した。まず、子育てで成功したことの原因帰属にかかわる項目の回答に欠損があるものを除いた上、遂行接近目標志向性に関する6項目の評定値の合計が高い者から60人を仮に遂行接近目標志向性高群とし、そこに含まれた者の評定値の最低点で一致していた者をすべて加えて最終的に遂行接近目標志向性高群を決定した。遂行接近目標志向性低群についても同様に、遂行接近目標志向性に関する6項目の評定値の合計が低い者から60人を仮に遂行接近目標志向性低とし、その群の評定値の最高点で一致していた者を加えて遂行接近目標志向性低群を最終的に決定した。その結果、遂行接近目標志向性高群は69人になり、遂行接近目標志向性に関する7項目の

評定値の合計の平均値は19.72 ($SD=1.85$) であった。遂行接近目標志向性低群は60人になり、遂行接近目標志向性に関する6項目の評定値の合計の平均値は8.92 (1.52) であった。

Table2. 遂行接近目標志向性の高群と低群における成功体験の原因帰属の平均評定値

	高群 ($n=69$)	低群 ($n=60$)	検定
統制可能性	6.43 (1.74)	5.10 (1.85)	***
周囲の協力・支援	6.36 (2.15)	6.47 (2.47)	
偶発的事項	9.20 (2.27)	8.22 (2.27)	*

* $p<.05$ *** $p<.001$

Table2は遂行接近目標志向性高群と低群の子育てに関する成功経験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、「統制可能性」の評定値が低群においてより高群の方における方が有意に高かった($t(127)=4.22, p<.001$)。この結果は、上手に子育てをすることを重視し、親や周囲の人に子育てが上手だと思われたいとの意識が強い遂行接近目標志向性の高い親はそういった意識をあまり持たない遂行接近目標志向性の低い親よりも、子育てで成功したことの原因を自分の努力や養育能力に帰属しやすいことを示している。遂行接近目標志向性の高い親は上手に子育てをすることを重視していることから、絶えず子育てをうまくやるためにはどうすればいいか、子育てをよりうまくやるためには何が必要かといったことを折に触れて考えることであろう。このことが子育てについて努力をしているという意識を強め、実際に子育てがうまくいけば、自身の養育能力に自信を持つことにも繋がっていくものと思われる。そのために、子育てで成功したことの原因を自分の努力や養育能力に帰属しやすかったのではないかと考えられる。

また「偶発的事項」に関する評定値が低群においてより高群の方における方が有意に高かった($t(127)=2.46, p<.05$)。この結果は、上手に子育てをすることを重視する遂行接近目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで成功したことの原因をそのときに自分の調子がよかったことや運に帰属しやすいことを示している。この結果は、遂行接近目標志向性の高い親が子育てで成功したことの原因を自らの努力や養育

能力に帰属しやすいことを示した「統制可能性」の結果と矛盾するように思われる。しかし、遂行接近目標志向性の高い親は絶えず子育てをうまくやることを重視して、様々な試行錯誤をしていることも考えられ、うまくいく場合とうまくいかない場合を対比させながら顧みる中で、その原因がすべてにおいて自分の努力や育児能力だけに帰属できない場合もあることも認識することも多々あるのではなからうか。そのために、子育てで成功したことの原因として、「偶発的事項」に関わることに帰属しやすかったのかもしれない。この結果をさらに詳しく検討するために「偶発的事項」に関わる3つの項目の評定値をみると、「その時の自分の調子がよかったから」については高群が2.87 ($SD=1.01$)、低群が2.37 (1.12)、「運がよかったから」については高群が2.59 (1.05)、低群が2.37 (1.19)、「子どもがいうことを聞いてくれたから」については高群が3.74 (1.02)、低群が3.48 (1.23)であった。それぞれの項目に関する高群と低群の評定値を比較するためにt検定を行ったところ、「その時の自分の調子がよかったから」のみ高群の方が低群よりも有意に高く($t(127)=2.68, p<.01$)、これ以外の項目では有意差はみられなかった。この結果は、遂行接近目標志向性の高い者の「偶発的事項」に関わる帰属は特に自分の状態に関するものに影響されていることを示している。子育てをうまくやるために自らが努力したり試行錯誤をしていると考えられる遂行接近目標志向性の高い者は、子育てで成功したことの原因として偶発的な「運」に関わることを帰属させたとしても、自分の調子といったやはり自分自身に関わることに限定されている可能性が窺える。このことは子育てで成功したことが自分の努力や養育能力に帰属しやすいこととそれほど矛盾しない意識であるようにも考えられものの、この点についてはさらに詳しく検討する必要がある。

「周囲からの協力・支援」に関する評定値については、遂行接近目標志向性高群と低群との間に有意差はみられなかった。この結果は子育てを上手にやることを重視する親であるか否かによって、子育てで成功したことの原因を周囲の人や行政機関の協力や支援に帰属する傾向には違いがみられないことを示している。評定値をみても高群、低群とも中間値近くの6点台であることから、周囲の人や行政機関の協力や支援といった要因は子育てを上手にやることを重

視している親にとって子育てで成功したことの原因として特に強く意識するものではないことが窺える。

遂行回避目標志向性との関連性

子育てに関する遂行回避目標志向性が子育てにおける成功経験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を遂行回避目標志向性の高い群と低い群に分類した。遂行接近目標志向性の高群と低群の分類と同様にして遂行回避目標志向性の高群と低群を決定した。その結果、遂行回避目標志向性高群は63人になり、遂行回避目標志向性に関する3項目の評定値の合計の平均値は11.83 ($SD=1.04$)であった。遂行接近目標志向性低群は64人になり、遂行接近目標志向性に関する3項目の評定値の合計の平均値は4.95 (1.06)であった。

Table3. 遂行回避目標志向性の高群と低群における成功体験の原因帰属の平均評定値

	高群 (n=63)	低群 (n=64)	検定
統制可能性	5.59 (1.96)	5.70 (1.87)	
周囲の協力・支援	6.48 (2.37)	6.56 (2.33)	
偶発的事項	9.41 (2.47)	8.55 (1.98)	*

* $p<.05$

Table3は遂行回避目標志向性高群と低群の子育てに関する成功経験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、「偶発的事項」に関する評定値が低群においてより高群の方における方が有意に高かった($t(127)=2.18, p<.05$)。この結果は、子育てが上手にできないことや、うまくできない親だと思われることに不安を感じたり、だめな親だと言われないうために子育てを頑張るという意識が強い遂行回避目標志向性の高い親はそういった意識をあまり持たない遂行回避目標志向性の低い親よりも、子育てで成功したことの原因を運がよかったことに帰属しやすいことを示している。これに対して、「統制可能性」と「周囲からの協力・支援」の評定値については遂行回避目標志向性高群と低群の間に有意差はみられなかった。この結果は、子育てで成功したことの原因として自らの努力や養育能力、周囲の人や行政機関の協力、支援を帰属するという意識において遂行回避目標志向性の高低に

よる違いがみられないことを示している。

子育てがうまくできないことに不安を感じたり、だめな親だと思われないうために子育てを頑張るという意識が強い親は、自らの子育てについて上手にできないという側面に意識が集中しがちであり、どちらかという子育てを上手にやるために努力をしたり、どうすればうまく子育てができるか、うまく子育てをするには何が必要なのかを考えながら試行錯誤をするといった機会に乏しいのではないかと考えられる。そのために遂行回避目標志向性の高い親は子育てで成功することがあったとしても、自分の努力や養育能力といった「統制可能性」に関わる要因や周囲の人や行政機関の協力、支援といった「周囲からの協力・支援」に関わる要因ではなく、運がよかったとか、子どもがいうことを聞いてくれたから、といった「偶発的事項」に関わる要因に帰属しやすい傾向があるのではないかと考えられる。

学習目標志向性との関連性

子育てに関する学習目標志向性が子育てにおける成功経験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を学習目標志向性の高い群と低い群に分類した。遂行接近目標志向性の高群と低群の分類と同様にして学習目標志向性の高群と低群を決定した。その結果、学習目標志向性高群は107人になり、学習目標志向性に関する3項目の評定値野合計の平均値は14.48 ($SD=0.50$)であった。学習目標志向性低群は84人になり、学習目標志向性に関する項目の平均評定値は11.08 (1.10)であった。

Table4. 学習目標志向性の高群と低群における成功体験の原因帰属の平均評定値

	高群 (n=107)	低群 (n=84)	検定
統制可能性	5.98 (1.77)	5.44 (1.63)	*
周囲の協力・支援	6.48 (2.37)	6.25 (2.19)	
偶発的事項	8.79 (2.39)	8.63 (2.29)	

* $p<.05$

Table4は学習目標志向性高群と低群の子育てに関する成功経験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、「統制可能性」に関する評定値が低群

においてより高群の方における方が有意に高かった ($t(127)=2.13, p<.05$)。子育てに生きがいや楽しさを感じたり、子育てを自分の成長につながると思う学習目標志向性の高い親はそういった意識をあまり持たない学習目標志向性の低い親よりも子育てで成功したことの原因を自分の努力や養育能力に帰属しやすいことを示している。「周囲からの協力・支援」や「偶発的事項」に関する評定値は高群と低群の間に有意な差はみられなかった。

学習目標志向性の高い親は、子育てに生きがいや楽しさといったポジティブな感情を抱きながら、子育てが自分の成長につながると感じる意識が強いことから、常に何かを学習しよう、獲得しようといった姿勢で子育てに取り組んでいるものと考えられる。それ故、子育てについて努力をする姿勢を持ち、子育てがうまくいけば自分の養育能力にも自信を持つという機会にも恵まれるのではないかと考えられる。そのために、子育てで成功したことの原因を自らの努力や養育能力に帰属しやすかったのかもしれない。

さらに学習目標志向性の高い親は、子育てに対して自分自身が生きがいや楽しさを感じ、自分の成長につながることを意識することが強いことから、子育てにおける自己の関与を強く認識しているものと思われる。そのために、学習目標志向性の低い親と比較して、子育てで成功したことの原因として運のよさや周囲の人や行政機関の協力や援助といった自分が関与しない要因を帰属しやすいという傾向がみられなかったのかもしれない。

(2) 子育ての目標志向性と失敗体験の原因帰属との関連性

遂行接近目標志向性との関連性

子育てに関する遂行接近目標志向性が子育てにおける失敗体験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を遂行接近目標志向性の高い群と低い群に分類した。まず子育てで失敗したことの原因帰属にかかわる項目の回答に欠損があるものを除いた上、遂行接近目標志向性に関する項目の評定値が高い者から60人を仮に遂行接近目標志向性高群とし、その群に含まれた者の評定値の最低点で一致していた者をすべて加えて最終的に遂行接近目標志向性高群を決定した。遂行接近目標志向性低群についても同様に、遂行接近目標志向性に関する項目の評定値が低い者から60人を仮に

遂行接近目標志向性低とし、その群の評定値の最高点で一致していた者を加えて遂行接近目標志向性低群を最終的に決定した。その結果、遂行接近目標志向性高群は67人になり、遂行接近目標志向性に関する6項目の評定値の合計の平均値は19.78 (SD=1.87)であった。遂行接近目標志向性低群は64人になり、遂行接近目標志向性に関する6項目の評定値の合計の4平均値は8.94 (1.56)であった。

Table5. 遂行接近目標志向性の高群と低群における失敗体験の原因帰属の平均評定値

	高群 (n=67)	低群 (n=64)	検定
統制可能性	7.16 (1.61)	7.23 (1.83)	
周囲の協力・支援	4.94 (1.89)	4.17 (1.76)	*
偶発的事項	8.56 (2.45)	7.22 (2.34)	**

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table5は遂行接近目標志向性高群と低群の子育てに関する失敗体験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、「統制可能性」の評定値に関しては高群と低群の間に有意差は見られなかったのに対して、「周囲からの協力・支援」($t(129)=2.41, p<.05$)と「偶発的事項」($t(129)=3.22, p<.01$)にかかわる評定値は低群においてより高群の方における方が有意に高かった。これらの結果は、上手に子育てをすることを重視し、親や周囲の人に子育てが上手だと思われたいとの意識が強い遂行接近目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで失敗したことの原因を周囲の人や行政機関の協力がなかったことや運が悪かったことに帰属しやすいことを示している。遂行接近目標志向性の高い親は上手に子育てをすることを重視していることから、絶えず子育てを上手にやるために様々なことを考え、努力しているという意識が強くなるであろう。またそれ故に自身の養育能力にも自信を持ちやすいのではないかと考えられる。そのために、遂行接近目標志向性の低い親に比較して、子育てで失敗したことの原因を自分の努力が足りないことや養育能力がないといった「統制可能性」にかかわるものに帰属しやすいという傾向はみられなかったものと考えられる。逆に、遂行接近目標志向性の高い親は低い

親よりも、子育てに努力していることや養育能力があるという意識が強いため、子育てで失敗したとしても、それは周囲の人や行政機関の協力や支援がなかったことや、運が悪かったためといった自分が関与しない「周囲からの協力・支援」や「偶発的事項」にかかわるものに帰属させやすかったのかもしれない。

子育ての成功経験にかかわる原因帰属の結果と対比させると、遂行接近目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで成功したことの原因は自分の努力や養育能力といった自分が関与する「統制可能性」にかかわるものを帰属させやすかったのに対して、子育てで失敗したことの原因は自分が関与しない「周囲からの協力・支援」や「偶発的事項」にかかわるものに帰属させやすかった。この子育てで成功したことで失敗したことの原因帰属の違いから、遂行接近目標志向性の高い親が子育てで支援として必要とすることが指摘できる。子育て支援は子育てがうまくいかないことに対して特に求められるものだと考えられる。したがって、遂行接近目標志向性の高い親の場合には、周囲の人や行政機関の協力や支援を必要とする意識が強いことから、より周囲から子育て環境面に重点を置いた支援が施されることが特に重要になるものと考えられる。

遂行回避目標志向性との関連性

子育てに関する遂行回避目標志向性が子育てにおける失敗経験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を遂行回避目標志向性の高い群と低い群に分類して比較した。遂行接近目標志向性の高群と低群の分類と同様にして遂行回避目標志向性の高群と低群を決定した。その結果、遂行回避目標志向性高群は70人になり、遂行回避目標志向性に関する項目の平均評定値は11.99 ($SD=1.21$)であった。遂行接近目標志向性低群は62人になり、遂行接近目標志向性に関する項目の平均評定値は4.94 (1.11)であった。

Table6は遂行回避目標志向性高群と低群の子育てに関する失敗経験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、「統制可能性」にかかわる評定値は低群においてより高群における方が有意に高かった ($t(130)=2.95, p<.01$)。この結果は、子育てが上手にできないことや、うまくできない親だと思われることに不安を感じたり、だめな親だと言われたいために子育てを頑張るという意識が強い遂行回避目標志向性の高い親はこういった意識をあまり持たない遂行回避目標志向性の低い親よりも、子育てで失敗したことの原因を自分の努力が足りないことや養育能力がないことに帰属しやすいことを示している。遂行回避目標志向性の高い親は、自分は子育てが上手にできないとかだめな親であるといった自分の至らない面に意識が向きがち側面があるのではないかと考えられる。そのために、子育てで失敗したことの原因を自分の努力不足であるとか、養育能力のなさといった自分に関与する「統制可能性」にかかわるものを帰属させやすいのかもしれない。

また「偶発的事項」にかかわる評定値は低群においてより高群の方における方が有意に高かった ($t(130)=3.45, p<.001$)。この結果は 遂行回避目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで失敗したことの原因を自分の調子が悪かったことや運が悪かったことなどに帰属しやすいことを示している。この結果は、遂行回避目標志向性の高い親が子育ての失敗の原因が自分とはあまり関係のない要因に帰属していると考えられる傾向が強いことを示しており、前述の結果で示した子育てで失敗したことを自分の努力不足や養育能力のなさといった自分に関与する要因に帰属しやすいという結果と矛盾するように思われる。そこで、さらに詳しく検討するために「偶発的事項」にかかわる3つの項目の評定値をみると、「その時の自分の調子が悪かった」は高群が3.37 ($SD=1.31$)、低群が2.81 (1.24)、「運が悪かったから」は高群が2.13 (0.99)、低群が1.90 (1.05)、「子どもがいうことを聞かなかったから」は高群が3.10 (1.30)、低群が2.45 (1.20)、であった。それぞれの項目に関する高群と低群の評定値を比較するためにt検定を行ったところ、「その時の自分の調子が悪かったから」($t(130)=2.60, p<.05$)と「子どもが言

Table6. 遂行回避目標志向性の高群と低群における失敗体験の原因帰属の平均評定値

	高群 (n=70)	低群 (n=62)	検定
統制可能性	7.73 (1.50)	76.92 (1.65)	**
周囲の協力・支援	4.70 (2.00)	4.23 (1.59)	
偶発的事項	8.60 (2.53)	7.16 (2.22)	***

* $p<.05$ ** $p<.01$

うことを聞かなかったから」($t(130)=2.96$, $p<.01$)が高群の方が低群よりも有意に高く、「運が悪かったから」は高群と低群の間に有意差はみられなかった。これらの結果から、遂行回避目標志向性の高い親は、子育てで失敗したことの原因として、あまり自分が関与しない運の悪さといったものよりも、自分の調子の悪さや子どもに言うことを聞かせられなかったといった、どちらかという自分に関与したものを帰属しやすいことが示唆される。子育てで失敗したことの原因として少なからず自分が関与するものに帰属しやすいということは、「統制可能性」に関する結果で得られたものと矛盾しないであろう。

子育ての成功経験の原因帰属の結果と対比させると、遂行回避目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで成功したことの原因は運がよかったからといったどちらかという自分が関与しないものを帰属させやすかったのに対して、子育てで失敗したことの原因は「統制可能性」や「偶発的事項」の中でも自分の調子の悪さといった自分が関与するものに帰属させやすかった。この違いから、遂行回避目標志向性の高い親が必要とする子育て支援のあり方を考えると、遂行接近目標志向性の高い親の場合、子育てがうまくいかない場合に、自分の努力不足、養育能力のなさといった自分にかかわることが原因であるという意識が強いことから、子育て支援では、親自身が子育てに対して努力をしていることや、養育能力があることを意識できる働きかけ、子育てに対する努力や養育能力を促す働きかけが特に重要であることが指摘できる。

学習目標志向性との関連性

子育てに関する学習目標志向性が子育てにおける失敗経験の原因帰属とどのような関係があるかを検討するために、調査対象者を学習目標志向性の高い群と低い群に分類した。遂行接近目標志向性の高群と低群の分類と同様にして学習目標志向性の高群と低群を決定した結果、学習目標志向性高群は110人になり、学習目標志向性に関する項目の平均評定値は14.45 ($SD=0.50$)であった。学習目標志向性低群は93人になり、学習目標志向性に関する項目の平均評定値は11.02 (1.17)であった。

Table7は学習目標志向性高群と低群の子育てに関する失敗経験に関する原因帰属3因子に関わる各項目の評定値の合計の平均値(標準偏差)

Table7. 学習目標志向性の高群と低群における失敗経験の原因帰属の平均評定値

	高群 ($n=101$)	低群 ($n=93$)	検定
統制可能性	7.27 (1.71)	7.22 (1.69)	
周囲の協力・支援	4.16 (1.85)	4.57 (1.75)	
偶発的事項	7.60 (2.40)	8.08 (2.19)	

の結果を示したものである。高群と低群の評定値の違いを比較するためにt検定を行った。その結果、いずれの因子においても学習目標志向性高群と低群の間に有意差はみられなかった。この結果は、子育てに生きがいや楽しさを感じたり、子育てを自分の成長につながると考える傾向のある学習目標志向性の高い親とあまりこのようには考えない学習目標志向性の低い親の間では子育てで失敗したことの原因帰属に著しい違いがみられないことを示している。

子育てにおける成功経験の原因帰属に関する結果と対比させると、学習目標志向性が高い親は低い親よりも子育てでの成功経験の原因として統制可能性のみが帰属されやすかったのに対して、失敗経験の原因帰属では、すべての因子において違いがみられなかった。このことは学習目標志向性の高い親は、子育てで成功したことの原因としては特に自分の努力や養育能力が統制可能性を帰属しやすい傾向を持つが、失敗したことの原因帰属としてはあまり偏った認識は持っていないことを示唆している。

総合論議

本研究では、子育ての目標志向性と、子育ての成功経験、失敗経験の原因帰属との関係について検討した。その結果、上手に子育てをすることを重視し、親や周囲の人に子育てが上手だと思われたいとの意識が強い遂行接近目標志向性の高い親は低い親よりも、子育てで成功したことの原因を自分の努力や養育能力といった自分が直接的に関与する要因に帰属しやすいのに対して、失敗したことの原因としては周囲の人や行政機関の援助、運の悪さなどといった自分の周囲にある環境的な要因に帰属させやすいことが明らかになった。この結果を親が必要とする子育て支援との関連で考えてみよう。親が必要とする子育て支援の内容が具体的にどのようなものかを考えた場合、特に子育てでうまくいかないことに対して必要とされるものであろう。となると遂行接近目標志向性の高い親の場

合、とりわけ周囲の人や行政機関からの協力、支援の充実を望む意識が強いものと思われる。したがって、このような親に対しての子育て支援としてはできるだけ周囲の子育て環境を充実させることが極めて重要になることが示唆される。具体的には子育てについての専門的な知識を持った人や同じように子育てをしている親と交流したり、情報交換するなど周囲の人から協力や支援が受けられる機会を豊富にする子育てサークルや、保育所等が中心になって行っている未就園児への保育サービスなどの活動をさらに充実させることが必要になるであろう。

子育てが上手にできないことや、うまくできない親だと思われることに不安を感じたり、だめな親だと言われないうえに子育てを頑張るといふ意識が強い遂行回避目標志向性の高い親はこういった意識があまりない遂行回避目標志向性の低い親よりも、子育てで成功したことの原因を運のよさや、子どもが言うことを聞いてくれたから、といった自分以外の要因に帰属しやすいのに対して、子育てで失敗したことの原因は同様に運の悪さを帰属させやすかったことに加えて、特に自分の努力の足らなさや養育能力のなさといった自己にかかわる要因に帰属させやすいことが明らかになった。このことから、遂行回避目標志向性の高い親が必要とする子育て支援は周囲の子育て環境を充実させることに加えて、特に自分の努力や養育能力を高めることにつながるものであることが示唆されるのである。したがって、このような親に対しての子育て支援としては、子育てについての日頃の努力や養育能力を認めてくれたり、自信を持たせてくれ、さらにそれらの向上を目指す具体的なあり方を示してくれる働きかけが極めて重要になること示唆される。具体的には、子育てでうまくいかないことが相談でき、子育てにはどのような努力が必要であり、実際にやるべきことのヒント等が得られる子育て相談や、保育の専門家を交えて子どもと一緒に遊び、子どもとの望ましい関わり方のヒント等を得ることで養育能力を高められる機会を提供する親子教室などの活動をさらに充実させていくことが必要になるであろう。

子育てに生きがいや楽しさを感じたり、子育てを自分の成長につながると考える傾向のある学習目標志向性の高い親はこのような考え方を持たない学習目標志向性の低い親よりも、子育てで成功したことの原因として、自分の努力や

養育能力といった自己にかかわる要因を帰属させやすいのに対して、子育てで失敗したこと原因帰属では著しい違いがみられなかった。この結果は、学習目標志向性の高い親は子育てで失敗したことの原因としては、特に自己にかかわる要因に帰属しやすいとか、周囲の子育て環境にかかわる要因に帰属しやすいといった偏った認識はあまり持たないことを示唆している。このことから、必要とされる子育て支援は、親自身の努力や養育能力が高まることにつながるもの、周囲の人や行政機関の協力、支援などの子育て環境の充実につながるものの両方をバランスよく充実させることが必要になるであろう。

本研究から、親の子育てに関する意識の違いによって、必要とされる子育て支援のあり方が異なることが示唆された。このことから、今後は子育てに携わる親の様々なニーズに対応できるきめ細やかな子育て支援のあり方の実現とそれらのさらなる充実が求められていることが示される。今後の研究では親の子育てに関する意識と必要とされる子育て支援の具体的なあり方との関係を探り、子育て支援の充実と明確な方向性を与える必要がある。

引用文献

- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. 1988 A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95, 256-273.
- Elliot, A. J., & Church, M.A. 1997 A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of personality and social psychology*, 72, 218-232.
- 小林佐知子 2009 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連 *発達心理学研究*, 20, 189-197.
- 黒田祐二・桜井茂男 2001 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係 *教育心理学研究*, 49, 129-136.
- 黒田祐二・桜井茂男 2003 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム：ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討 *教育心理学研究*, 51, 86-95.
- 桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学：無気力が発生するメカニズムを探る *風間書房*

- 田中あゆみ・山内弘継 2000 教室における達成動機，目標志向，内発的興味，学業成績の因果モデルの検討 心理学研究，71，317-324.
- 神田直子・山本理絵 2001 乳幼児を持つ親の，地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究：子育て支援事業参加者と非参加者の比較から 保育学研究，39，80-86